水辺の記憶を継承し新しい水防災文化を

代表理事　塚原　浩一

水辺は地域とまちにとって特別な場所だと思う。

元々、地域の人々は水辺からまちをつくり、水の恵みを享受し産業を発展させながら洪水の脅威に備え、地域の幸せを願って水辺で神様に祈ったりお祭りを催したりしてきた。

縄文の昔からの狩猟採集文化も水辺が主要な拠点であり、農耕文化はなおさら水辺が生産活動の中心となり、さらに経済拡大の過程でも物流拠点は水辺だった。水の恵みを享受し水辺にまちをつくるのが必然だった。そのかわり、治水の技術や災害に備えた住まい方など、水の脅威と折り合い受け流す知恵も発展させてきた。そういった水辺の営みのなかから、それぞれ地域独自の水辺の文化やまちなみ、自然景観が育まれてきた。

そういう地域社会の水辺の記憶を大切にしたい。

水辺がまちの中心だった頃から世の中は大きく変わり、産業・物流、生活様式、ヒトの志向などが様々に変遷し、価値観が多様化し、社会は姿を変えていくが、その奥底にある地域とまちの記憶は容易には消えないと思う。だからこそヒトは水辺に集まり、水辺で遊び、水辺にやすらぎや癒しを求めるのではないか。水へのこだわりはヒトの意識の古層に構造的に埋め込まれていると思う。

実際、そういう記憶が今も水辺とまちに息づいている。

水に関わる様々な地名がいたるところに残されているし、神社仏閣、お祭り、お城、古い水まちや様々な水辺の生活様式、伝統文化や産業など、都市が変容し川が人工的になったり蓋掛けされたりしたとしても、そうしたところにも古層からの記憶が多く残されている。古い物語だけでなく新しい物語のなかにも水辺の心象風景が印象深く描かれたりもする。

水辺の景観は近代の都市開発で大きく変わったが、そういう文化の古層を再発見し水辺の意味の見直しを進めていきたい。水辺にはこうした地域の伝統文化や歴史の記憶が連綿とあり、現代にも様々な形で、精神性の面でも文化の面でも景観の面でも残され引き継がれ、今でも大きな財産となっていると信じる。

だから、水辺のまちづくりは単なる賑わいづくりではないし、都市開発のつけたしの潤いづくりでもないし、まして単に空間として活用すればよいというものでもないと思う。水辺にはイロイロな機能や意味が内包されている。単に水辺で癒される、安らぐ、という以上に、もっと深いところでヒトの精神性とつながっているのではないかと思う。

さらに言えば、水辺は、江戸や大阪の下町に代表されるように文化の発信地でもあったし、その時代々々の水辺はヒトが集まる場としてのビジネスの場、水の恵みを活かした生産の場、物流の拠点でもあった。もともと単なる癒しの場であるだけではなく、その時代々々のビジネスチャンスが水辺にあった。いまそれに代わるものがなにか追及していきたい。現代社会のなかでの様々な水辺の価値の評価をしたい。

結局、水辺はまちと自然の変化のセンサーなのだと思う。まちと自然の境界であり、非日常のゲートウェイでもある。かわまち・水辺・ウォーターフロントを再生する、そういう水辺に回帰する動きが活発になっているのは、そういう水辺とまちの関係性を再構築しようとする試みなのではないか。日本ではまだまだ少ないかもしれないが、欧米などでは人工化した川を自然に戻し、都市にも水辺を回復させ、あわせて防災や生態系保全を進めるようなネイチャーポジティブの取り組みが先行し、むしろ主流となってきている。

アジアモンスーン地域にあって森と水の国である日本は、元々自然と調和し共存する文化であり、水辺はその象徴であり自然との共生の窓口でもあると思う。日本でこそ、このような水辺のネイチャーポジティブの取り組みを進めなければならないし、日本でこそ、そのような取り組みが支持されるのではないかと思う。

温暖化でどうなっていくかも気になる。

水害の頻発化は逆に水辺への関心を高めるし、水辺の再生が災害復興のシンボルともなる。そういう意味で水辺は水防災文化の道標だと思う。水辺の伝統文化を古層から掘り起こし現代に再構築することが、温暖化の時代に防災力のある自然と共生できる地域づくりにつながる。